

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05621・19K20827

研究課題名(和文)17-19世紀日本・朝鮮・中国三国関係史の研究 相互の阻害と連結に留意しながら

研究課題名(英文)Trilateral Relationships among Japan, Korea and China in 17th-19th Centuries

研究代表者

程 永超 (CHENG, YONGCHAO)

名古屋大学・高等研究院(文)・特任助教

研究者番号：80823103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、17-19世紀国家間の正式な外交のない日本・中国の間における朝鮮王朝の介した間接的な政治繋がりに着目し、その繋がりを具体的に実証し、グローバル・ヒストリーの手法を用いて東アジア国際関係史の再構築を目指す。日朝関係と中朝関係という複数の二国間関係を積み重ねるのではなく、日朝中の三国間関係を同時に取り扱うことにチャレンジする。本研究は従来日本で行われてきた対外関係史研究では見えなかった日朝中の絡まり合った多様な関係の解明が、朝鮮を媒介項とする日中関係史という新たな歴史像の構築を介して果たされるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまで既存の日本の対外関係史で見えてこない日朝中の絡まり合った多様な関係を解明した。朝鮮によって媒介された日中関係史という新たな歴史像を提示し、近世日中関係を再考する契機となっている。これらの研究成果によって、近世対外関係史研究の再考を呼びかけ、学界の注意を喚起している。近世対外関係史の研究分野において、二国間関係史を超えて研究を進めることの重要性を説く機会となった。また、本研究はグローバル・ヒストリー手法での東アジア史再構築に新しい議論を提供した。

研究成果の概要(英文)：From my empirical analysis, I demonstrate that placing Joseon Korea as a mediator between Tokugawa Japan and Ming-Qing China, who had not established formal diplomatic relation in the 17th~19th centuries, allowed China and Japan to have mediated political connections. To truly understand the trilateral relationship is not to build up bilateral relations between any of the two, even in a detail-oriented way. By sleight of hand, Joseon Korea benefited from being the mediating state, manipulating diplomatic relations between Japan and Qing China to its own ends.

研究分野：日本史

キーワード：東アジア国際秩序 三国関係史 対馬 朝鮮 日明交渉 宗家文書 壬辰戦争 日朝貿易回復

1. 研究開始当初の背景

16世紀以前の中世までとは異なって、17世紀から19世紀に至る近世には、日本(徳川)と中国(明・清)とのあいだには国家間の正式な外交がなかった。近世の日中関係は、政治外交関係としてはかろうじて朝鮮王朝と琉球王国を介することで間接的なつながりを見出せるような希薄な関係と考えられてきた。江戸幕府は「鎖国」の下にあったと理解され、長崎・対馬・薩摩・松前の四ヶ所(日本近世史研究で言う「四つの口」)を介してのみ異国・異域との交流が成し遂げられた。これを中国大陸の側から眺め直すならば、中国(明・清)は朝鮮・琉球を介することで日本との繋がりを保つこととなった。

日本と中国の仲介者としての琉球王国については、琉球王国かがやがて日本の一部となったゆえに江戸時代における「独立王国」としての外交実態や日本・中国(明・清)との文化交流など各方面での研究が進みつつある。その一方、中国(明・清)からすれば朝鮮王朝は一番忠実な藩属国であるが、朝鮮王朝を介した日中関係の実態にはなかなか光が当たらない。

本研究は豊臣秀吉の朝鮮侵略の戦後処理こそが近世の日本・朝鮮・中国(清)三国による国際秩序構造の形成に多大な影響を与えているため、この過程を精緻に分析する必要があると考えた。とくに朝鮮を介した日明国交回復交渉と引き続く清朝中国の対日通交交渉に関する系統的な研究はほぼ存在しない。

2. 研究の目的

本研究は、17-19世紀朝鮮経由の日中通交交渉の過程と実態の究明を目的とする。「日本 朝鮮 中国」動線の検討によって、近世日中外交関係形成における朝鮮の役割と位置付けを究明することで、東アジア国際関係史を再構築する。

3. 研究の方法

本研究の方法論は、簡潔に述べれば「比較」と「関係性」というグローバル・ヒストリーの基本手法である。その手法に則って、近世東アジア世界を構成する諸地域の相互連関や影響関係を解明し、東アジア国際関係史の再構築を試みる。

具体的には、旧来の日本史で行われてきた二国間関係史を基調とする対外関係史研究の枠組みを越え、「日本 朝鮮 中国」の三国相互の動線に焦点を当てる。それが歴史学である以上は文献史料を中心とした分析を主軸に据え、まずは徳川幕府の対中国政策とそれへの朝鮮・中国の反応を記した記事を日本・朝鮮・中国(明・清)三国の史料のなかに探し出し、交渉の具体過程を復元する。既に入手済みの史料を子細に検討するとともに、ソウル大学校奎章閣・韓国国史編纂委員会・韓国学中央研究院など韓国各地に散在する近世日朝中関係史料を調査・収集

する。朝鮮側の漢文史料はもちろん、日本側の史料(漢文史料とくずし字史料)と中国側の史料と付き合わせて多くの史実の確定に努めるとともに、日朝関係と中朝関係の関連性についても検討を行う。

4. 研究成果

2018年6月～2019年6月の韓国在外研究を通じて、大韓民国国史編纂委員会とソウル大学奎章閣に所蔵される史料を体系的に調査した。この一年間にわたる史料調査に基づき、日本・朝鮮・中国(明・清)三国の史料を照らしあわせ、また対馬宗家文書に記載された中国情報を中心に情報流通の面から近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究を進めた。

その成果は主に以下のものである。

(1) 壬辰戦争の戦後処理で求められた日明通交交渉過程と実態の解明

具体的に、朝鮮経由の日明交渉交渉をめぐる幕府と対馬藩の動向を詳しく分析し、複数のルートが併存する時期と朝鮮経由ルートのみ依存する時期に分けて考察し、その実態を掘り下げたとともに、朝鮮経由の日明通交交渉過程の全体像を描いた。

そして、後金(のちの清朝)による朝鮮侵略(丁卯の乱、1627)以後に対馬藩によって進められた朝鮮との交渉に注目した。それは対馬藩外交僧(規伯玄方)を正使、家老杉村采女を副使にして、朝鮮の王京まで到達した近世唯一の国王使である(1629)。従来学界で注目されていない「方長老上京往復書翰」(『善隣通書』に収録)、規伯玄方『方長老上京日史』、鄭弘溟著『飲冰行記』、『分類紀事大綱』を利用して、交渉過程を究明した。そのうえで、交渉に関わる三者(明・朝鮮・日本/朝鮮・対馬・幕府)の絡み合う秩序に注意しながら分析し、明朝・朝鮮・日本三国間における朝鮮の位置と、朝鮮・対馬・幕府間における対馬の位置の類似性を指摘した。

(2) 十七世紀初頭における日朝間の貿易回復と明朝中国の関連性の解明

十七世紀初頭における日朝間の貿易関係回復過程の検討を通じて、朝鮮王朝は明朝中国の意見を徴しながら対日貿易再開を模索したことを明らかにし、日朝間の貿易回復をめぐり明朝中国・朝鮮・対馬が絡み合う具体像を描き、壬辰戦争(豊臣秀吉の朝鮮侵略)後の日朝関係形成には明朝中国が不可欠の政治的存在であることを示した。

(3) 情報流通の面から三国間関係史の分析

筆者が韓国在外研究中に、国史編纂委員会の対馬宗家文庫で従来学界に注目されていない、二次史料である太平天国関係の資料を発見した。これを機に、史料調査対馬宗家文書に記録された中国政治変動に関する史料を網羅的に収集し、分析を進めている。まずは研究蓄積の薄い明清交

替初期（清の入関）と太平天国期を中心に、朝鮮経由で中国情報の日本伝達過程における朝鮮と対馬の役割に注目した。また、対馬藩が中国情報収集活動を開始する動機、そして近世期に対馬藩による中国情報収集活動の変遷を初歩的に分析した。ここに、17-19世紀対馬藩が収集した中国関係情報を網羅的に整理し、「北京 ソウル 釜山 対馬 江戸」ルートの通時的考察と再評価が東アジア国際秩序の再構成と連動することの必然性が見いだせるので、本研究によって得られた端緒は次の科研費の研究課題に引き継がれる。

上記の三点によって、17-19世紀中国・朝鮮・対馬（幕府）が絡み合う具体像を究明し、「日本 朝鮮 中国」動線の検討によって、近世日中外交関係形成における朝鮮・対馬の役割と位置付けを具体的に実証してきた。

なお、以上の研究成果の一端を日本（島根県立大学・早稲田大学・名古屋大学）・中国（山東大学・南京大学・台湾中央研究院）・韓国（ソウル大学）の国際シンポジウムやセミナーで日本語・中国語・韓国語・英語でそれぞれ口頭報告を行い、質疑に応じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 程永超	4. 巻 0
2. 論文標題 太平天国情報の日本伝達ルート:対馬宗家文書を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「16 - 19世紀東アジア国際秩序の成立と変容の研究」国際シンポジウム開催記録集	6. 最初と最後の頁 106 ~ 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 程永超	4. 巻 0
2. 論文標題 17世紀前半朝鮮経由の日明通交交渉から見る日・朝・中三国関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「16 - 19世紀東アジア国際秩序の成立と変容の研究」国際シンポジウム開催記録集	6. 最初と最後の頁 196 ~ 217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 7件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 17世紀前期經由対馬及朝鮮的日明通交交渉与中日朝三国関係
3. 学会等名 第三屆壬辰戦争研究(国際)工作坊「壬辰戦争与日本、朝鮮、明朝三国経済」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 17世紀前半朝鮮經由の日明通交交渉から見る日・朝・中三国関係(韓国語)
3. 学会等名 奎章閣韓国学研究院第104回コロキウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 Taiping Rebellion in the Tsushima So Family documents
3. 学会等名 UBIAS 2019 Workshop “Migrations: Movement of People, Ideas, and Goods” (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 Chinese Turmoil in Tsushima So Family documents
3. 学会等名 UBIAS 2019 Workshop “Migrations: Migrating and Culture Spaces” (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 對馬藩宗家史料中の「唐兵亂」情報
3. 学会等名 2019海洋史工作坊:明末清初の東亞變局與亞洲海域(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 17世紀初頭の日朝関係と中国 - 日朝貿易の回復と朝鮮の倭情辯証を中心に
3. 学会等名 国際シンポジウム「歴史的轉換期における東アジア国際関係の新解釈」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 程永超
2. 発表標題 17世紀前半朝鮮經由の日明通交交渉から見る日・朝・中三国関係」
3. 学会等名 シンポジウム「16 - 19世紀東アジア国際秩序の成立と変容の研究 日本・朝鮮・中国(明清)三国の比較という視点」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----